

# 海念と保兵衛

…… 心こそ心まどわす心なれ、  
心に心心ゆるすな ……



タストラベル!



= 縦書き仕様 =

※これは、所収ページが部分の“サンプル”です！

「海念と保兵衛

……心こそ心まどわす心なれ、心に心心ゆるすな……」

ひろせやすお

〈あらすじ〉

北品川はその昔、江戸から東海道を下る第一の宿、「品川宿」として栄えた。この北品川には少なくない史実が残されているが、その昔「沢庵和尚」で名を馳せた「東海寺」のあつたこともそのひとつである。

沢庵禅師と時の將軍家光との緊張した関係は、「紫衣事件」などでも知られている。そこからは、沢庵禅師が幕府権力と対峙しながら禅の道を生きたという悲痛さが窺え知れる。そして東海寺とは、そうした沢庵禅師の苦渋に満ちた息遣いが残された寺であつたに違いない。

時は昭和三十年代、三百年以上が経過した北品川に、あだ名を保兵衛という十歳の少年が登場する。その保兵衛はひよんなことから、沢庵禅師、家光、宮本武蔵などの名を耳にする江戸時代初期へとタイム・トラベルをしてしまった。

場所は、自身が住んでいる、二百年前の北品川、その東海寺の広大な境内の一角である。保兵衛を迎えたのは、東海寺和尚沢庵禅師その人であり、「清流」目黒川、賑わい始める品川宿、広重の版画そのままの品川海岸やその沖などの光景であった。

が、何よりも宿命的な出会いをすることになったのは、自分と同じ年、十歳の少年禅僧「海念」であった。この後二人は、意気投合し、時空を越えた友情に育まれていくことになる。

不遇な過去に縛られた海念は、沢庵と武蔵の縁によつて東海寺で救われつつあったのだが、それにもかかわらず、海念は、沢庵自身が歩んだに違いない苦汁の生き様、その轍へと、避けがたく嵌り込んでゆくこととなる。海念の幼心に刻まれてしまった「過去」が、まるで海念自身を引き回しているかのようにある。

保兵衛と海念は、時空が隔てるまま、その後成人していく十余年間、おのおのの時代環境の中にあつて、時代が提起する熾烈な課題を真摯に受けとめて生きる。そして、彼らの視界の片隅には、いつ

も沢庵禅師の影法師が収まっていたはずなのである。権力の蠢きと、自身の心のざわめきとの双方を凝視して止まなかつた和尚の影が：

そんな中で、三百年以上を隔てながらも、あたかも同時並行的に展開するかのようにな大きな出来事が二人を捕らえようとしていた。このくだりがクライマックスとなる。

海念にとつての「由井正雪の乱」がそれであり、保兵衛にとつての「全共闘運動」がそれであつた。いずれも、老獪な権力が歯を剥き出しにして生贄を漁る、そんな局面だということになる。

人の心はどうしたら「自由」となれるのか。老獪で醜悪な権力が人の自由と、自由を願う人の心を奪うことは世事であろう。だが、人が本当に自由を得るためには、もうひとつ承知しておかなければならない視点がありそうである。

「権力と仏法のはざまに生きた和尚」とも称される沢庵禅師が吐露した言葉は、まさに時空を越えてのタイム・トラベルで現代に届

きながら、今なお現代人の胸中で生々しく共鳴し続けているようではないか。

「心こそ心まどわす心なれ、心に心心ゆるすな」（沢庵）

## 〈 解 題 〉

この小説執筆のひとつの動機は、子どももの頃から青年期までを過ごした「北品川」という地点への郷愁であったらう。

「幕末」の品川宿も、北品川の歴史を彩る見るべき史実であったが、東海寺・沢庵和尚周辺の史的事実は、燻し銀のごとくわたしの関心を引き続けたものであった。

出身中学校が東海寺の元境内に建てられていたことや、小学校のすぐ脇に、沢庵ゆかりの「弁天社」(安藤広重は『名所江戸百計／品川すさき』でこの「弁天社」を描いている。現在は「利田」か「た」神社)と名を変えている)があつたこと、また、この神社のすぐ隣には、「鯨塚」と呼ばれる、江戸時代に品川沖で射止められた鯨を鎮魂する塚が残されていることなども、当該時代への興味を駆り立てる材料となつた。

さらに、昭和三十年代の頃にはすでに、目黒川はほとんどぶ川のように汚染されていたが、そんな川でも、子ども時代のわれわれには興味深く慣れ親しむ環境なのであつた。しかし、その昔、小説の舞台となつた頃には、目黒川は「清流」そのものであつたと目される点には、ちよつとした驚きと強い興味が喚起されないではいられなかつた。

そうした関心が、三百年前の北品川を何らかの形で蘇らせたいという思いにつながつたとも言える。

したがって、文章化する際には、できるだけ史実に忠実であろうと願い、調査もどきの下調べを行うことも惜しまなかった。

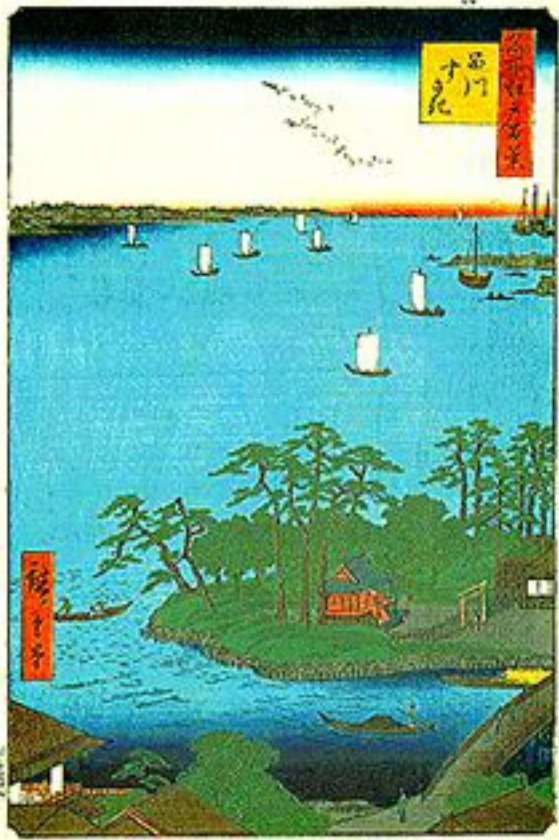
主題は概ね定まっていた。東海寺の主、沢庵和尚こと沢庵宗彭の試みた「権力と仏法のはざまに生きる」「生きざまについて近づいてみる」こと。凶らずも「(心の)自由」とは反対概念である「権力」に添うことを選ぶ結果となりながら、自由であり続けようとした沢庵の生き方には、時代を超えたテーマが脈々と息づいていると思えたのである。

ただし、偉人・沢庵を直接対象とすることは筆者が力量不足であることと、また読者にとっても距離があり過ぎると思えたことにより、少年禅僧の海念や、現代に生きる保兵衛の登場としたわけである。

なお、この作品は、ホームページによって、週一回の執筆で50週、約一年間に渡って連載し続けたものである。こうした執筆環境であったことから、何よりも読者が興味を持続してゆくことに多大



な意を払うことになった。したがって、この作品は「長編」ではあるが、読み始めると、「やめられない止まらない」という「かっぱえびせん」のような「あとに引く」作用が隠されているはずなのである。「一気に読み切る」そんな作品となっているようである。



品川すさぎ(江戸百景歌川広重)と、弁天社

文政11年(1828年)絵図  
～御殿山周辺～

出典：品川区教育委員会  
『しながわの史跡めぐり』



【第一部】

- (1) お坊さんは、ひよつとして沢庵和尚ですか？
- (2) 闇の中の少年の視線は、一点に向けられたまま凍っていた！
- (3) 保兵衛さん、今日からはあなたは禅僧になるんです！
- (4) 宮本武蔵に認められた同い年の海念さん！
- (5) 美しくせせらぐ目黒川と三百年前の品川海岸！
- (6) 海念さんって、なんてすごいんだ！完璧に尊敬しちやう！
- (7) 家光を唸らせた超人の禅師沢庵和尚！
- (8) 百五十年も前に、海念が予感した品川沖の鯨！
- (9) 保兵衛は思い切って海念の実家を訪ねた！
- (10) 海念さんのお母さんが語った武士としてのお父上！
- (11) 二人の大人、武蔵と沢庵和尚による海念さんへの計らい！
- (12) 「けんだま」がきっかけとなった海念への「告白」！
- (13) 三百年以上未来の時代に対する海念の好奇心！

- (14) 『四つの凶柄』の書の謎が、解けそうに解けない……
- (15) お手上げとなつた謎を知るのは和尚さまだけ？
- (16) 『不立文字（ふりゆうもんじ）』とだけ答えた和尚の思惑！
- (17) 語られることのない沢庵和尚の胸の内！
- (18) せつかくのこんな時に江戸城が大火事だなんて……
- (19) さまざまな心で受けとめた江戸城の大火事！
- (20) 「へえー、そんな筋書きになつていたんですか……」
- (21) 「ええーつ、そんなー。三十年以上も将来のぼくが……」
- (22) 無の境地を目指すのじゃ！……ここでの思いに引き摺られてはならぬ！

【第二部】

- (23) 保兵衛らしい現代への生還ぶりと、海念からのみやげ！
- (24) 「あるいは、保兵衛さんは苦勞不足かもしれませぬね！」
- (25) 沢庵和尚の遷化と保兵衛、海念の青春の挫折
- (26) 自分を恥じ入るかのような印象が溢れる海念！
- (27) ジョン・レノンのあの反権力的スタンスは……
- (28) 保兵衛の不吉な予感と海念の旅立ち
- (29) 夕靄かかる大川での親子心中！そして海念
- (30) 直太郎、今日からおめえはうちの子だあ！
- (31) 浪人中村小平太どのとの出会いに始まるふたすじの糸
- (32) 海念！魔術師たちの罠に近づかないでくれ！
- (33) 運命の糸を手繰り寄せてゆくこととなる海念！
- (34) 浪人の親子に降りかかる災難と海念の苦肉の策！
- (35) 保兵衛の懸念がもどかしい夢で海念に届く！

- (36) 目の前の総髪で袴姿の男を見定める海念！
- (37) 由井正雪への三人三様の評価と知恵伊豆！
- (38) 奇遇としか言いようのない神田で遭遇した二人！
- (39) 人生をたった一つの希望に託してはいけない！
- (40) 白銀で被われた眩い東海寺は海念の前途を祝福する？！
- (41) 知恵伊豆とともに悪知恵を働かす者たちの密談！
- (42) 権力欲の獣たちの餌食になんかさせるものか！
- (43) 知恵伊豆の密偵、林理左衛門たちによる攪乱！
- (44) 敵の恐さを知る小平太には妥当な判断ができたが……
- (45) 十三郎殿をむざむざひとりで死なさせるわけにはいかない！
- (46) 弁天社での出来事が海念の運命を変えてしまった……
- (47) 一陣の潮風が、運命の連鎖をかたちづくる……
- (48) 十三郎殿、拙僧が、故郷の諏訪までお供いたしましよろぞ！
- (49) 思いつめた三人目の時空超越者、静さん！
- (50) 強い心でありえないなら、せめてやわらかい心で……

【第一部】

(1) お坊さんは、ひよっとして沢庵和尚ですか？

少年は、木陰から覗く秋空を流れる雲を眼にしながらも、半ばうとうととしている。

伝馬舟は、もやい綱を、荏原神社に面した護岸の突起に引っ掛けていた。こんなところが見つかったら大変なことは十分承知してはいる。だが、眠くてたまらなくなり、そんな奇妙な場所、伝馬舟の中で奇妙な格好で身を横たえていたのだった。川面の揺らぎで、伝馬舟は気持ちよく揺れた。程近い京浜国道を流れる単調なクルマの音が聞こえてくる。何とも無心な心持ちとなり、次第にボワーンとした睡魔が少年を捕らえ始めていたのだった。

少年は誰かの呼び声で目が覚める。いつも早朝に出勤する習慣の

ある父親に、起こしてもらおうことを頼んでいたのだ。早朝マラソンの自主トレをしようかと決めていたのである。小学生だったが、負けん気の強い子である。品川区の体育大会出場に選ばれ、すっかりその気になっていたのだ。

「うん、分かった」

と言って、上半身を起こす。が、頭の中はもやーっとしていた。人通りのない早朝の通りを走る自分の姿のイメージなんぞが思い浮かぶ余地はなかった。父親は、

「じゃ、出かけるからな」

と言って出て行った。

「行ってらっしゃーい」

と言ったところまでは覚えていた。

再び、誰かが少年を呼んだ。

「おいおい、そこのわらべ、起きなされ！」

聞き覚えのない野太い声が寝ぼけた少年の耳を捉えた。初秋の日は傾き、もう薄暮となっていた。いやそんなことより、「わたしは誰？わたしはどこに？」というほどのパニックが少年を包み込んでいた。辺りは見覚えのない光景なのであった。川岸には葦が生茂っている。微かに夕日を残した方向に建物などは見当たらず、ところどころに小高い林を背負った丘を含む田園がうら寂しく広がっていた。自分を載せた伝馬舟を浮かべる川は、澄みきった涼しげな水がさらさらと流れていた。

「日も暮れるというに、そなたはここで何をしているのじゃ？」  
声のする方に目を向けると、一人の僧侶がこちらを眺めて立っていた。残照に映える顔はすでに六十歳を超える年寄りの面持ちがうかがえた。

「わからないんです……」

少年は、途方に暮れた心細さをそのまま声にして、伝馬舟から降



りた。ズツクの足元に寄せるさざなみは、濡れることを気にさせない清らかさだった。

その僧侶の背後を見渡すと、小高い場所に真新しい立派な寺が望めた。

「ここは、どこなんですか？」

「これはこれは、早々に難しい問答をなさるわらべじやな」

「??????」

「此処（此岸）は此処にして此処に非ず。無住（むじゅう）の境地に入らば、彼の地（彼岸）のみあるべし」

「??????」

「此の地の俗名は、お上が建立せし品川の東海寺なり」

「えっ、東海寺？姉が通っている城南中の近くにあるあの東海寺？すると、お坊さんは、ひよっとして沢庵和尚ですか？」

「おうおう、そなたはわしのことを承知なのか」

「で、お上というのは、どなたですか？」

「わしの名を知りながらお上の名を知らぬとは、家光殿もなおいつ  
そのの精進、精進」

「ひやあー、沢庵將軍に家光和尚、じゃなかつた、とにかく沢庵に  
徳川家光だなんてこりや一体どうなってるんだあー。いや、きつと  
これは夢なんだ……」

「おかしなことを言うわらべじゃ。覚めている者がこれは夢ではな  
いかと疑うことはある。じゃが、夢をみている者は、覚めるまで夢  
とは気づかぬのが道理じゃぞ。まあ、よかろう。仮に夢であつたと  
しても、此処をそなたが望んだことには違いがない。また、現（う  
つつ）は夢のごとし、夢は現に通ずじやからの」

「きつと夢なんだ……。伝馬舟で寝ちやつて……。上潮で流されて  
……。一度父ちゃんに起こされて……。あー分かんない」

「わしは、海岸の散策から寺へ戻るところじゃ。暗くなるで、よけ  
れば今夜は寺で休むがよい。舟は、その松の根にもやつておけばよ  
かろう」

少年は、やつとのことほつとした気分になりかかった。と思うと、堪えていた空腹がにわか意識された。少年の内の腹の虫は、きつと夕飯にはあの『沢庵漬け』が膳に載るに違いないとにらんでいた。

(2) 暗闇の中の少年の視線は、一点に向けられたまま凍っていた！

寛永十五年、徳川家光は禅僧沢庵和尚のために、品川に東海寺を建立した。この当時の品川のこの一帯は、家光が鷹狩に出向くような場所である。寺の背後には山が迫り、寺の敷地には田園が一面に広がっている。森が散在し、目黒川を挟む谷も深く、その清流が海へ注いでいた。松林、竹林越しに海原も望め、山紫水明の景観だっ

たのである。

こんな場所であつたこと、和歌を愛し、自然を愛する沢庵和尚の目に叶つたことが、丹波の小庵をこそ己が定住の場と見なし続けてきた沢庵和尚にようやく移住の決意をさせたのであつた。ただ、「紫衣（しえ）事件」（寛永六年）から覗ける、禅の道と権力（幕府）との緊張関係といつた解きがたく心煩わしい問題が、和尚の視野の外であつたわけではなかつたとも思われるのではあるが……

「和尚さん。和尚さんは、ぼくが何者だか気にならないのですか？」  
もうすっかり暗くなるうとしていた寺への道すがら、少年は尋ねた。

「どう気にすればよいのかな？」

「だからさあ、おまえはどこから来たのじゃ、とか、ひよつとしておまえは違つた時代から、何かの拍子でこの時代に紛れ込んでしまつたのではないのか、とかさあ……」

「そうなんじやる。そのようなことは最初から承知しておる」

「ええっ、じゃあ、ぼくはやっぱり、タイムトラベルしちゃったっていうわけー？こりや大変だ！みんなが心配するじゃないのー。どうする？どうすればいいんだあー。和尚さん、そんな涼しい顔しないで教えてよー」

「まあまあ、往生際の悪いわらべじゃのお。ほらほら、寺に着いた」  
が、その時和尚は、思い立ったように立ち止まり、振り向いて言ったのだった。

「時空を戻ることはた易いことじゃ。じゃが、こじらせてはいかん。寺の者たちには、他言は無用ぞ。よいか。おおい、海念、海念は居らんか。今戻ったぞ」

沢庵和尚は、寺の玄関で、幼い弟子の海念を呼んだ。そう言えば、海念は少年と同一年の十歳前後なのであった。

「お帰りなさいませ、和尚さま。はっ、そちらのお方はどちらさまでしよう？」

「こちららはな、海路遠路はるばる旅しているお方じゃ。そうじゃな。何と言うたかの？そうじゃそうじゃ保兵衛さんだったかの？」

「うひやあー。何でそんなことまで知ってんのー？確かに、ぼくのあだなはやすべえだけど……」

「すると、十兵衛様にゆかりの方？和尚さまのお知り合いの柳生宗矩（むねのり）様ご子息の柳生十兵衛様の？」

「何を言っておる。無関係じゃ、無関係じゃ。今夜は、いや、しばらくは滞在されることになろうかな……、海念、よくお世話するのじゃぞ」

少年は、海念ほか数名の弟子たちとともに、禅寺ゆえの質素な夕餉を済ました。やがて弟子たちは、夜の修行のため本堂へ向かい、少年はひとり残された。まだ建立されたばかりの寺は、木の香り、畳の匂いが漂い、少年は、新しい旅館にでも通されたような気分でもあったが、時々言い知れない不安が押し寄せてくるのを自覚した。

『和尚さんは、元の時代に戻ることはた易いことだと言ってくれたけれど、どうやって戻るんだろう？信じるしかないな。戻れるんだつたら、この際思いつきり冒険しちやうかな。こんなことつて、そうあるもんじやないからな……』

暗くなつた石庭をぼんやり眺めながら少年は廊下に座つていた。

「保兵衛さん、保兵衛さんの寝具はわたしの隣に用意します。朝のお勤めは早うございませうので、今夜はもう就寝されるのがよろしいでしょう」

海念は、質素な寝具を用意したあと、寺での修行生活のあらましを少年に伝えた。離れた場所にある厠へも案内し、その使い方も説明した。起床は夜明け前で、朝餉前にはそれぞれが受け持った仕事をしなければならぬこと、そして明日は、少年も海念とともに、焚き木を集めにゆこうという予定もまとまつたのだつた。

床に就いたかと思つたら、海念はすぐに寝息をかいていた。少年

は、しばらく寝付けないうでいた。障子越しの月明かりだけの部屋の中は暗かった。きよろきよろと眺めまわしているうちに、暗さに目が慣れ部屋の中の様子が見えるようになってきた。

とその時、少年は思わず「あつ」とつぶやき、急いで右手を口に当てた。身体がぞくぞくとしてくるのを抑えられなかった。暗闇の中の少年の視線は、一点に向けられたまま凍っていた。

(3) 保兵衛さん、今日からはあなたは禅僧になるんです！

寝つかれない夜を少年は悶々とした。

つい先ほど、偶然に気づいたもの、それが心から離れなかったの



である。

『あれは、一体どういうことなんだろう？』  
が、やがてスーツと深い眠りに落ちていった。

「保兵衛さん！保兵衛さん！」

海念は、薄い掛け布団を背負い込むようにして縮こまって寝ている保兵衛を揺り動かした。初秋の夜明け前は一段と冷え込み始めていた。

「ハッ、ウーム……」

一瞬、ここは？と思ったに違いない。だが、周囲は静かながら緊張感に満ち溢れていた。修行中の他の弟子たちがすべるように迅速な身のこなしで起床し始めていたのである。眠りに落ちる前のすべてが、ほどなくよみがえったのだった。

そして、言うまでもなく「気掛かりなこと」を思い出していた。ちらっとそれに視線を向けてみる。が、やはり間違ではない。夜

明け前ではあつても、薄明に浮かんだそれは、保兵衛の確信をただただ深めさせることになった。

早朝の座禅が終わるや否や、海念は保兵衛を井戸の近くに行くよう促した。

何のことだか分からず言うままになってその場所へ向かった。やがて海念は両手に何やら衣類を乗せて戻ってきた。

「保兵衛さん、今日からはあなたは禅僧になるんです」

海念が着用していたという白装束と黒い袈裟が、井戸端の脇の腰掛けの上に置かれた。そして、それらの上の手拭には、小刀が挟まれているのが見えた。

「和尚さんからの急なお言いつけなんです。わたしの古い装束で恐縮なんですが使ってください。それから、頭髪はわたしが剃らせていただきます。兄弟子たちもわたしが手伝っておりますので、腕は確かですからご心配は無用です」

保兵衛は、啞然とした。もはや一言もことばを差し挟む余地がなかった。しかし、保兵衛は、和尚には泣き言が言えても、同い年くらいはこの海念に向かつては言えなかった。また、彼とは友だちとしてやってゆこうと考えてもいたからだろうか。

黙って海念の言うとおりになり丸坊主とされてゆく保兵衛は、多少みじめに見えたかもしれないが、これが最も自然な成り行きなんだろうと観念していたに違いない。

寺の外のこの時代の人たちと顔を合わせないわけにもいかないとすれば、海念さんとまるで双子のような格好となつてるのが一番無難なのだろうな。多分、和尚はそう配慮したに違いない、と想像していた。

「イタツ」

「ごめんなさい。ちよつと手元が狂ってしまいました。でも傷にはなつてません」

保兵衛は、その痛みから、こうしていることが決して夢なんかじ

やないんだと改めて実感させられた。

「さあ、終わりました。さっぱりしましたでしょ。そうそう、薪集めは朝げが終えてから出かけましょう。和尚さんからも、保兵衛さんを寺の敷地と周辺を案内しながらお勤めしてきなさいと言われました」

とその時、突然木々の間でがさがさという音がして、薄茶色の野うさぎが駆け出した。

「うわっ、あんなものがあるんだ！」

「ここは、しばらく前まではお殿様の鷹狩の場だったくらいですから、野生の動物と頻繁に出会いますよ」

「お殿様というのは、家光将軍のことだよね」

「そうです、そうです。たまに、お来しになることがあるんですよ。」

お殿様は豪快なお方で、先日は、何か食したいと仰せになり、和尚さん発案の『たくわえ漬』を添えてお出ししたところ、『これは美味じゃ、美味じゃ。何と申すものか』とお尋ねになりました。和

尚さんが、備蓄のために考案したくたくわえ漬け>でございます、とおっしゃったなら、『うーむ、和尚の発案ゆえに、今後はくたくあん漬け>と命名するがよかろう』と仰せになりました。みんなして大笑いをしたものです」

「へえー、そうだったんだ。家光將軍まで来られるお寺なんだね」

「武蔵さんも立ち寄られたことがあるんですよ」

「ひよっとしてあの剣豪の宮本武蔵？ひゃー、ここはなんてとこなんだー……」